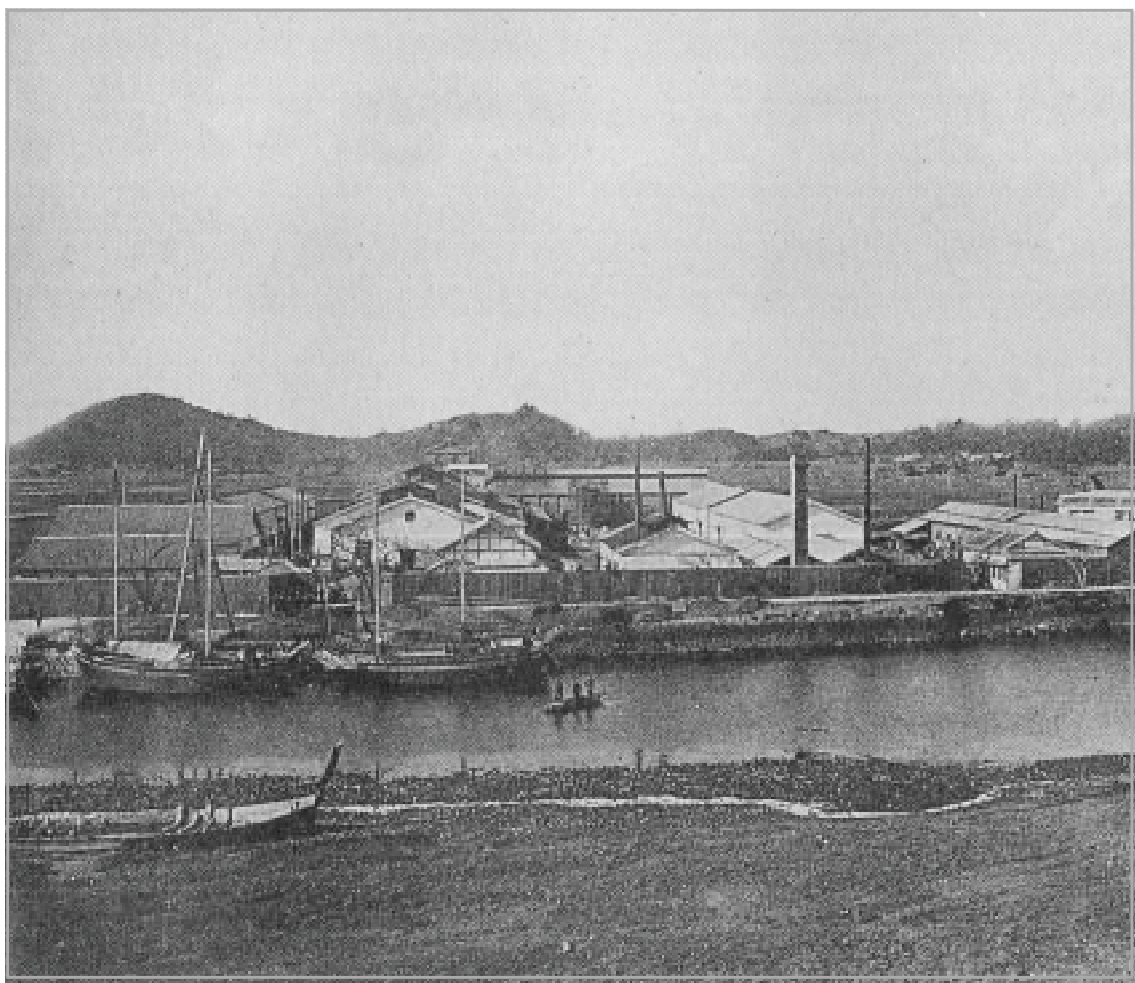


4 チッソはどのような会社だったのですか？



明治に作られたチッソ旧工場

チッソは、明治の終わりに水力発電の会社としてスタートしました。その電力を利用してカーバイド工場を水俣に作り、やがて化学肥料の生産を始め、日本にとって重要な化学会社として成長しました。

チッソの発展は水俣のまちの発展でもありました。水俣は人口が増え、熊本県下でも有数の工業都市となり、元工場長が市長を努めるなど、地域に対するチッソの影響力や住民のチッソへの依存度も大きくなりました。

チッソは化学肥料のほか、酢酸、塩化ビニールやその成形に必要な可塑剤（かそざい）の生産に力を入れ、戦後も日本の高度経済成長を支える企業の一つとなりました。

大正時代からチッソ工場排水による海の汚染は、たびたび問題になっていました。しかし、チッソは1932年（昭和7）から1968年（昭和43）まで、酢酸や可塑剤などの原料となるアセトアルデヒドを作るときに触媒として無機水銀を使用し、その過程で副生されたメチル水銀を1966年（昭和41）まで、ほとんど無処理のまま海に流しました。

チッソは工場排水が水俣病の原因とわかってからも、操業中止などはしませんでした。最初の水俣病裁判の判決の中で、このような企業倫理の欠落は厳しく批判されました。